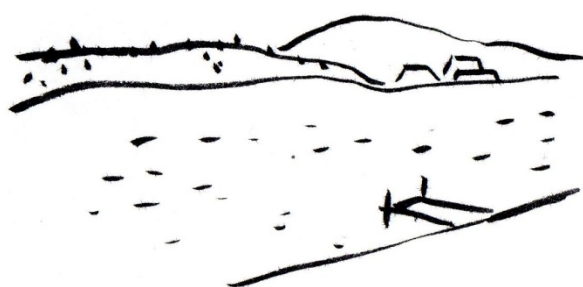


江南市制六十周年記念市民公募事業

こうなんの
むかしばな



はじめに

江南市が誕生して六十年を迎える年。

何か記念の事業として、江南市に伝わる昔話を紐解いてみたいと思いました。長年、この土地に住んでいても、子どもたちに土地の昔話を語る事ができませんでした。今回この企画を進める中で、江南の地に生きた

先人たちの日々の営みから生まれたお話に、江南の風土や歴史、産業に思いを馳せることができました。是非、機会をとらえて

子どもたちに語り継ぎたい、語り継いでいってほしいと願ってやみません。

市制六十周年の事業としてこの冊子を作成できましたことを大変うれしく思っています。

また、再話につきましたは、尾北ホームニュースの紙面に昭和六十一年一月から平成四年三月まで掲載されました「ふるさと民話」から地域、年代などが重ならないよう配慮して四編を選びました。

執筆者は、郷土作家 滝秀花さんです。

この「こうなんのむかしばなし」で作品を使うことを快諾していただきました滝秀花さんご遺族様、尾北ホームニュース様に心より感謝いたします。

加えて、この事業を進めるうえでご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成二十六年十二月

特定非営利活動法人子どもと文化の森



おかまじぞう お釜地蔵

こうにん ねんごう
弘仁の年号ということですから、今から
せんにひやくねん まえ
千二百年ほども前にあたる平安時代のお話です。
おわり くに こおりむら こうなんしこおり ひやくしやう
尾張の国は小折村江南市小折江に、お百姓の
わか ふうふ なか
若い夫婦がとても仲むつまじく暮らしておりました。

ふうふ すうねん こだから めぐ
ところが、この夫婦は数年がたつても子宝に恵
まれず、どうしても子どもがほしいとの願いをこめ
のらしごと い かねら つじごう じぞう
て、野良仕事の行き帰りには、必ず辻堂のお地蔵
さまにお参りをつづけておりました。そのうちのこ
とです。夫婦の願いはかない、玉のような男の子
おおよろこ つねまる なまえ まいにち
がさずかって大喜び、常丸と名前をつけて毎日
せいちやう たの よる
の成長を楽しんでおりましたが、ある夜のこと、

つま こうねつ だ かんびやう
妻はとつぜん高熱を出して、看病のかいもなく
ふつかご な
二日後には亡くなってしまいました。

こ ちい ちち こ せいかつ
子どもはまだ小さいし父と子だけの生活ではと、
きんじよ ひと ごさい
近所の人のすすめにより後妻をもらいました。初
めのうちは何事もなく過ぎていききましたが、日
つねまる わんぱく ままはは
たつにつれ常丸はだんだんと腕白になり、継母の
て あま ちちおや つねまる
手に余るようになりました。それでも父親は、常丸
のすることをとがめることなく可愛がるので、
ままはは きい かわい かねまる かの
継母には気に入りません。それどころか常丸の顔
み
を見るだけでもにくたらしくなって、することなす
て あ なまきず ま
ことに手を上げ、いつも生傷のたえ間がありません
んでした。
ごがっ は ひ つねまる
五月のよく晴れた日のことです。常丸はもう
よんさい ちちおや はたけ
四歳になっておりました。父親が畠でとれた



野菜やさいを持って黒田くろだの市いちへ行商ぎょうしょうに出かけて留守るすになつたとき、鬼おにのようなおそろしい心こころとなつたママママは、つねまるつねまる ふろがまふろがま いにころいにころ 継母お母は、常丸つねまるを風呂釜ふろかまに入れて煮殺おぼそうと思おもいたち、やさしい声こえで常丸つねまるを呼びよせると風呂ふろに入れ、蓋ふたをすおると大きな石いしをのせて、外そとの焚たき口ぐちからどんどんと火ひを焚たきはじめました。

一方いっぽう、行商ぎょうしょうでちちおやちちおやへんむなへんむなに出た父親ちちおやはなんだか変へんに胸むなさわぎさわぎがするので、途中とちゆうから引き返ひかえしてきました。

風呂ふろの蓋ふたの上に大きな石いしがのつているので不思議ふしぎに思おもい、中なかをのぞいてみると、ただ湯ゆがぐらぐらにと煮にえたぎにっております。どうなつじどうっているのほうだろうととまどつねまるっているところへ、辻堂つじどうの方ほうから常丸つねまるが裸はだかでとんで来て今いままでの出来事できごとを話はなしました。

そしてもうだめかと思おもったとき

「たすけてー。アツーイ。たすけてー」

ひっし おおごえ さけ ふろ ふた う
必死になって大声で叫ぶと、風呂の蓋が浮いて

つじじょう じぞう りようて み つねまる だ
辻堂のお地藏さまの両手が見え、常丸をすくい出
して助けて下さったんだというのです。

これまでのいきさつをいつの間にかそばで聞いていた継母は、自分の行った罪の深さを知り、

お地藏さまの尊い御心にやつとふれて
「私がすべて悪うございました。今までの罪ほろ

ぼしを致します」
そういうと両手を地面について、深々とあやま

りました。そしてその後、継母は頭の髪をそり
おとすと尼さんになり、お地藏さまと風呂釜をも

らい受けて地藏庵を建てると、そこで生涯を奉仕
したといわれております。



このお話がいつしか世間に広まると、こんな
尊いお地藏さまのことですから、みんなは「お釜
地藏」と呼んでお願いごとにお参りするようにな



りました。

かまくらじだい はい かまじぞう

鎌倉時代に入るとお釜地蔵は、そっくりそのま

にんげん おな おお てつ かまじぞう か

ま人間と同じ大きさの鉄のお釜地蔵に変えられ、

まえ じぞうどう た

前よりもりっぱな地蔵堂が建てられて、ますます

ひょうばん たか

評判が高くなりました。

ひやくすうじゅうねん

それから百数十年ほどもたったでしようか、

かまじぞう けいだい おううんざんじょうかんじ た

お釜地蔵の境内に桜雲山常観寺が建てられ、そ

いこう じょうかんじ かまじぞう ひ

れ以後は、常観寺のお釜地蔵として引きつがれて

なが としつき あいだこ

きました。このように長い年月の間子どもをお

まも くだ かまじぞう きゅうしようがつ

守り下さりつづけたお釜地蔵は、旧正月の

にじゅうよつか きゅうしちがつ にじゅうよつか めいにち

二十四日と旧七月の二十四日のご命日には、子

う おお ひと たい

ども連れの多くの人たちが大へんなにぎわいをみ

こんにち おわりろくじぞう ひと めいせい

せ、今日まで尾張六地蔵の一つとしてその名声は

き

消えることはありません。

まめど わた
豆渡の渡し

むかーしむかしは、鎌倉時代のいつごろかのお話と思われます。尾張の国の草井村江南市草井にはひろーい木曾川の南沿いにある部落で、そこには草井の渡し場がありました。そして、その渡し船で向こう岸についた美濃の国の少し入ったところに、下男を二十人ほど使い、夏は大豆ばかりを作っているのです、大豆長者と呼ばれる大きな屋敷がありました。

ある年の夏になったばかりのころです。長者は下男たちを集めると、いつもの年のように

一石五斗約二七〇リットル大豆の種を渡し、あちらこちらにある自分の畑へまくように申しつけました。

ところがところがです。この部落の前年は、米や麦、野菜までが不作だったので、食べるにひもじい思いをしている毎日でした。下男たちは畑でこのたくさんある大豆の種を見ると、急に食べたくなくなり「一石五斗もある大豆だでしょう。五斗ぐらいは食べても、うすーくうまくまけばわからんはのう」五助がちよつと首をすくめていいだしました。するとみんなも腹をへらしていたので

「そうだ」「そうだ」「そうしよう」などと口々に賛成して、ついに大釜を持ってきて大豆を煮はじめました。



五斗の大豆を食べ終ってもあまりにおいしかったので、下男たちはわれを忘れて、また五斗の種を煮ると食べはじめました。つづいて最後の五斗にも手をつけ食べはじめましたが、やっと満腹になったときには少しだけ残ったけれど、一度煮てしまった大豆のこと、もう芽をふく種にはなりません。いいだした五助は心配になってきて

「長者さまに、どう話したらいいのかな」

こんどは暗い顔をして相談をもちかけました。しかしこれといったよい考えはなく、その日はだまったままわが家へと帰っていききました。

三日ほどたって、下男たちが大豆を食べた畑にやってくる、大豆を煮る前に水洗いをしたところに、たった一本だけ大豆が生えておりました。

それからの下男たちは長者にそしらぬふりを
して、かわるがわるに一本の大豆の苗を、だいに
だいに育てました。そのうち、下男たちの願
いが通じたのでしようかその大豆はすくすくとのび
て、二カ月ほどもたつと、今まで見たことも聞いた
こともない大木になっていきました。

やがて実りの秋になりました。下男たちは、
大喜び。大木にのぼって一生けんめい大豆のさ
やを取ってから実にすると、それはなんと五石余り
にもなったのです。

取れた大豆をすべて長者の倉に納めた下男た
ちは、次に大豆の大木をやつと切り倒し、五台の
車にのせると声をはり上げ、木遣唄を唄いながら
長者の屋敷に引きこみました。



「こ、こ、こりやあ、どうしたことだ」
話を聞いて腰をぬかささんばかりにおどろいた
長者は、しばらくの間ボーッとしておりました
が、そのうち



「このふしぎな大豆の太木で船を作ろう。そして
 前の木曾川に浮べて渡し船にするのじゃ。うん」
 自分でそう返事をする、翌日には船大工を呼
 んで一隻の船に仕上げました。
 その後、大豆の太木船は乗り心地が良いと近在
 の評判になり、木曾川を渡る多くの人たちの足
 となつて親しまれました。

しょうわよんじゅうよねんしがつついたち あいぎおおはし かんせい
 昭和四十四年四月一日に愛岐大橋が完成す
 るまで、愛知県側は草井の渡し、岐阜県側は前渡の
 渡しとしてつづいた渡し船の、鎌倉時代のその
 歴史の中には、大豆の「豆」の字をとつたのか、
 「豆渡の渡し」と書かれた、古い記録も残ってい
 るそうです。

ころく まき 小六の楨

むかしむかし、織田信長や豊臣秀吉が育つた、戦国時代中ごろのお話です。尾張の国飛保村（江南市前飛保）に、日輪山曼荼羅寺という山内十三院を持つ大きなお寺がありました。その一つに寺子屋「梅陽軒」（本誓院）があり、そこに小六という大へんわんぱく童子がおりました。

小六の父は一里（四キロ）ほど東にあたる、稲木庄宮後村（江南市宮後）に住んでいた蜂須賀彦右衛門正勝（幼名小六）で、和尚さまを見込んで、立派な大人になるようあずけられていたのです。

小六のわんぱくは近在でも評判でした。手習いするときなど机にらくがきはするし、小刀で傷はつ

けるし、また外へ出ると、子分をしたがえ戦争ごつこをして山内や近くの山林を走りまわり、たえず生傷がたえませんでした。でも和尚さまは、小六を大きな人間に育てるため、よほどのことがないかぎり叱つたりはなさいませんでした。

こんな小六が十一歳（四年生）の夏の夕ぐれどきのことです。まだあたりは明るく蝉が鳴いておりました。どこで拾ってきたのかきたならしい小さな甕を大切そうに抱きかかえ、山門を入ってきました。

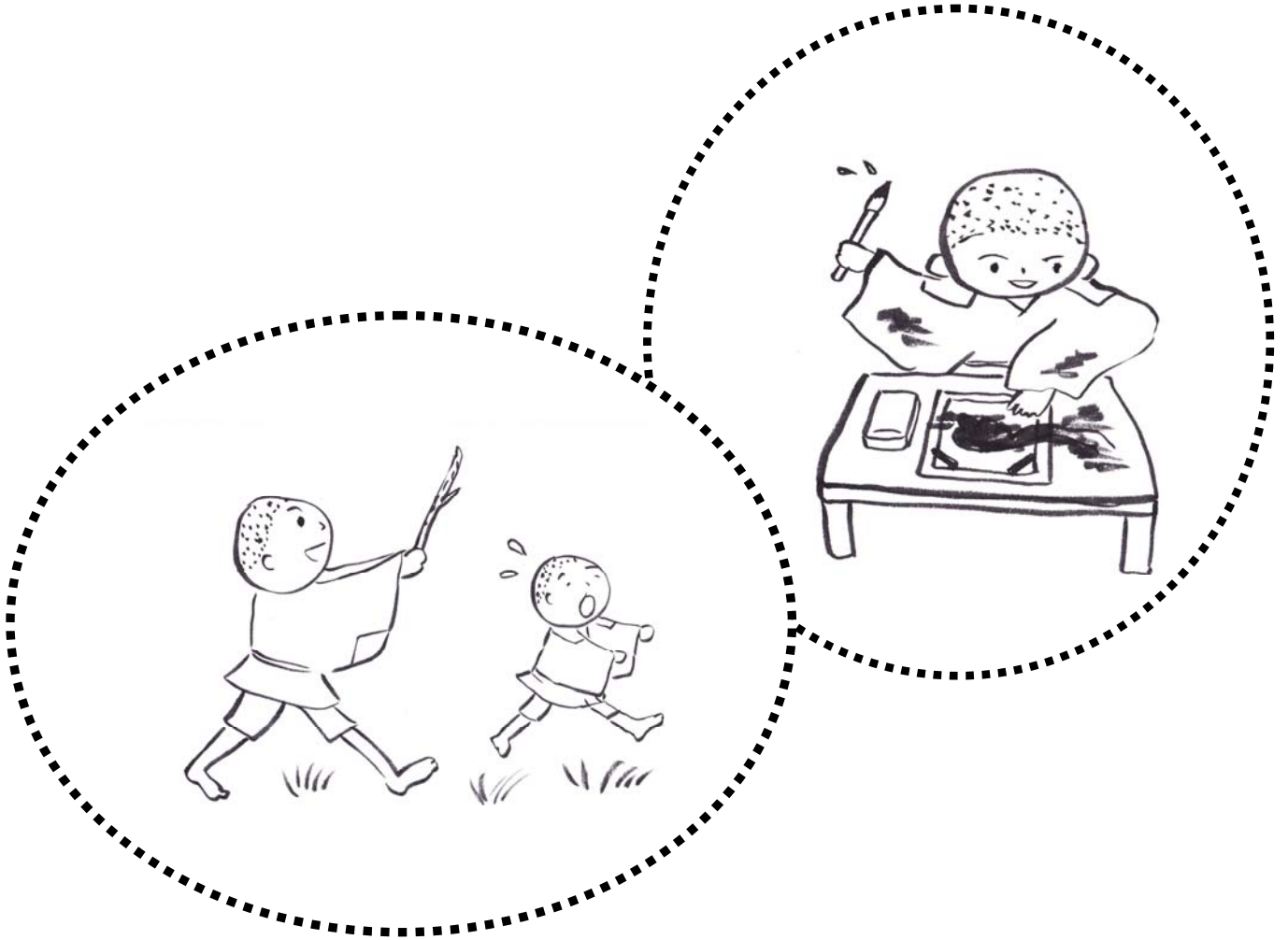
和尚さまが

「これこれ小六、それはなんじゃ」

と尋ねられると、少しとくいげな顔をして

「和尚さま、見てちよー」

甕を目の前にさしだしました。中をのぞかれると、かぶと虫やくわがたが五・六匹かさなりながら入っ



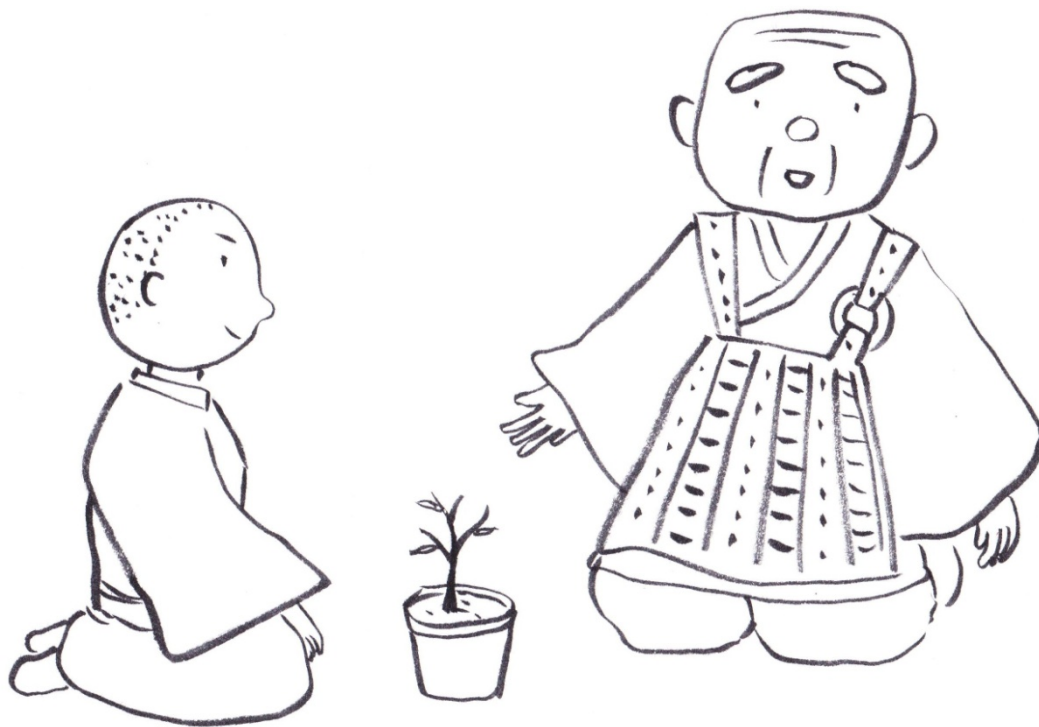
ております。それから二日ほどの小六は、その甕かめを
 宝たからのように持ち歩いておりましたが、三日目のこ
 とです。例れいの甕かめが、庭先にわさきにころがつているのを見ら
 れた和尚おしょうさまは、小六ころくを呼んで
 「虫むしどもをどうしたんだ」

そう聞きかれると

「もとの木きのおうちへ返かえしたー」
 と言いいながら、門もんの外そとへ飛び出だしていきました。

お正月しょうがつも過ぎすて、小六ころくも十二歳じゅうにさいになりました。
 和尚おしょうさまは「寒かんごり」といって、寒中かんちゅうに頭あたまから水みず
 をかぶる修行しゆぎようがならわしでしたので、朝早あさはやくから
 起おき、小六ころくも起おこして

「わしはこれから水みずをかぶる。どうだお前まえもやって
 みるか」



凍りついた夜明けのことです。少しむりかと思われ
 ましたが尋ねると、元気一ぱい

「私もやりまゝす」

さつさと井戸屋形の方へ行き、水を汲み、二人並
 んで寒ごりを始めました。終ったあと、和尚さまの
 よろこびは、一通りではなかったようです。

三月の吉日。小六は親元へ帰る日がきました。和
 尚さまの方が朝から落ちつかないようすでしたが、
 小六を本堂の正面に座らせると、昨夜から用意し
 ておいた、墨で書いた白い長い紙を見せ、声高らか
 に「眞ヲ以ツテ大木ニナレ」

と文字を読み上げられました。そして一本の槇の
 苗木をわたし

「槇と言う字は木へんに眞と書く。お前にふさわ
 しい木じゃ。記念に植えていくがいい」

こう話はなされると佛前ぶつぜんに座すわり、お
ごそかに読経どきようを始はじめられました。

のち ころく 後に小六あわいつくは、阿波一國とくしまけん（徳島県）
とくしまじようしゆ はちすかいえまさころく
の徳島城主・蜂須賀家政公として
りようみん 領民からしたわれましたが、その
ときう 時植えられた榎まきは、やがて大木たいぼくと
なり、"小六の榎"として最近さいきんま
で親したしまれてきました。しかし、
しやうわよんじゆうくねん 昭和四十九年、どうしたことが枯か
れてしまい、切きられる運命うんめいとなり
ました。今いまはその根ねっ子こだけが、
ほんせいじん もん よこ 本誓院の門の横に、ありし日の面
かげ 影をしのばせております。

このお話はなしは、史実しじつをもとに創作そうさくしたものです。



親切ねずみ

むかーしと行って、それほど古いお話ではあ
りません。尾張平野の北を流れる木曾川沿いに、
鹿子島かのこじま 江南市鹿子島こうなんしかのこじま という小さな部落があり
ました。

前も後まえ うしろ も土手にはばまれたこの鹿子島は、ちよ
つと大雨が降ると木曾川の水がしみ出し、少ない
田んぼはもちろんのこと、畑までが水につかり、
農作物がとれなくなるのがしばしばで、しかたな
く男は行商おとこ ぎやうしよう に出かけ、女は手機おんな てばた などをおつて、
貧しいくらしを支えておりました。

ある年の秋のことです。その年は天候に恵まれ、
麦も野菜も米までも豊作でしたので、ささやかな
がらも村祭りをするようになりました。

長老連中が部落の宝ともいうべき覚書
帳を見ようと、鎮守様の生島神社に集まりまし
たが、その覚書帳がいつの間になくなってい
て、大へんなさわぎとなりました。社の中をはじ
めとして広い境内まで、草の根を分けてさがしま
したが見あたりません。みんなでひたいを集め、そ
れぞれの記憶をもとに話し合いましたが、どうして
もわからないのです。なかには責任を感じて、家へ
帰ってから病気になる、寝こんでしまった老人も
おりました。

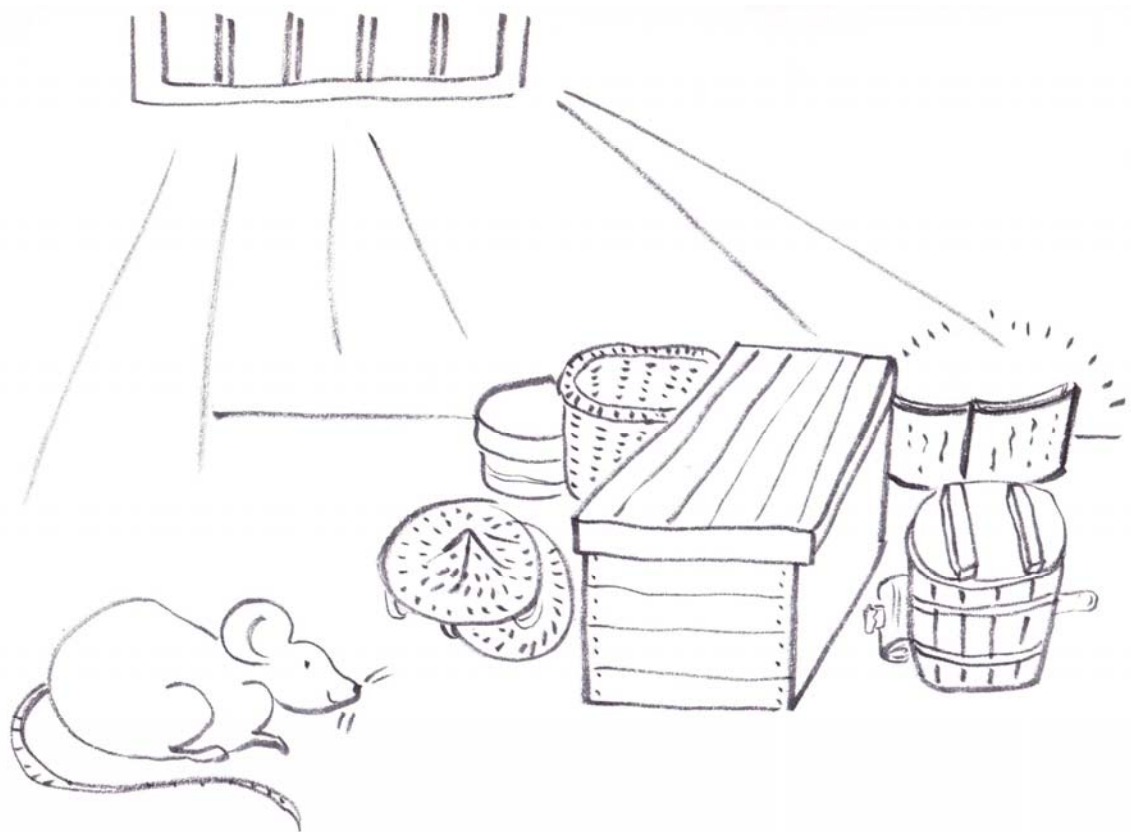
長老連の一人で裏の土手近くに、仙五郎とい



う頭あたまのはげたおじいさんが住すんでおりました。
 部落ぶらくの人ひとたちは少すこしあわてものだが、気きのやさし
 いほねおり好きずのこのおじいさんを仙せんじいさんと
 呼よび、子こどもたちから大たいへん親したしまれておりま
 した。

覚書帳おぼえがきちょうがなくなつて、五日いつかほどたつた朝あさのこ
 とです。仙せんじいさんが祭まつり道具どうぐを調しらべておごうと、
 郷藏ごうくらをあけて中なかへはいろうとしたとき、サツとさ
 しこむ光ひかりの中なかでねずみが一匹いっぴき、小ちいさな眼めをショ
 ボシヨボさせながら、仙せんじいさんの顔かおを見みつめて
 おります。とてもかわいい眼めをした利巧りこうそうなねず
 みでした。

「それにしてもよう、ずい分ぶんとあつかましいチユ
 公こうだなも」



仙せんじいさんが語かたりかけるようにつぶやくと、ね
ずみは二度三度眼にどさんどめをパチパチさせました。そして
大きな道具箱おほ どうぐばこの向むこうへ、ゆっくりとさそうように
消きえたのです。ところがどうでしょう。ねずみの逃に
げていったあとを、なにげなく眼めで追おっていた仙せんじ
いさんは、腰こしをぬかさんばかりにビックリ仰ぎょう天てん。
長老連ちやうろうれんちゆう中ちゆうをはじめ部落ぶらくの人ひとたちが、あれほど
一生いつしやうけんめいさがした鎮守ちんじゆさま様の覚書帳おほえがきちやうが、
道具箱どうぐばこの向むこう側がわに、さも申しわけなさそうに落お
ちているではありませんか。根ねがあわてものの仙せんじ
いさん、覚書帳おほえがきちやうをしつかりとふところに抱だきこ
むと、長老ちやうろうのところへころがるようにかけこみま
した。それを聞いた部落ぶらくの人ひとたちは、
「よかったなも、覚書帳おほえがきちやうが見つかった」

「ほんと、これで秋祭りも安心してやれるでなも」
 などと、まるで盆と正月をいっしょに迎えたよ
 うに明るくなりました。
 そしてそれから仙じいさんは人に会うと、口
 ぐせのように郷倉の話をして、話に花を咲かせ
 ました。

「とつてもかわいいかしこそうなねずみだったわ
 なも。眼をパチパチさせたのはよう、きつと
 覚書帳はここにがあるよ」と教えてくれたんだ
 ぜーも。親切なねずみだがなも。部落の恩人だ
 から、これからはねずみをころさんようにして

ちよーよ
 それ以来この部落では、親切で利巧なねずみの
 恩をいつまでも忘れないよう、猫をかわなくなつ

たといわれます。

猫もかえないほど貧しかった鹿子島部落に、今
 も伝わるお話です。



尾北ホームニュースで掲載された
江南の昔話は、この冊子に掲載した
四編の他、まだ多くのお話があります。
その他の作品を簡単に紹介します。
江南市に伝わるお話は、まだまだ
たくさんあります。
また、探してみてもおもしろいですね。



神明裏の人柱 【宮田】

水害に悩む村では娘を人柱にと決めた。その話を聞いた通りがかりの老人が身代わりとなり、土の中から「南無阿弥陀仏」の念仏が三日間続いた。その後、村は水害にあわずにすんだという。

一つ輪伝説(一)おじやこさま 【後飛保】

昭和の初めの話。氏が森のぐみを食べようとし太い幹から落下。三日三晩うなされる。その太い幹が大蛇のようだったとか。その後も村人たちが、うちわのような耳をした大蛇をみたり通った跡をみつけたりするようになり「一つ輪だ」「大蛇だ」と言い、いっしか氏が森のことを「おじやこさま」と呼ぶようになった。

一つ輪伝説(二)円と千巻経 【後飛保】

大蛇が通った跡が一軒の屋敷前に円を描いてあった。ほどなくその家の女の子が亡くなってしまふ。祟りだと村人たちはおそれた。それから何年かたち、いたずらで古井戸に石をなげこんでいた子を托鉢僧がみつけ「千巻経」を家の主に渡す。一心に仏におがむことで祟りからまぬがれ、それ以降ご先祖さまを大切にしたいという話。

一つ輪伝説(三)クーニャン(支那娘) 【後飛保】

支那事変(日中戦争)が始まり、チャイナブームになっていた頃。夜遅くに、おじやこさま近くでチャイナドレスを着たクーニャンをみかけた男がいた。あまりの美しさに目を奪われていると、すーっと消えた。次の朝、一つ輪の跡がみつきり大騒ぎする村人たちが。昨夜の出来事と重なるので男は気味悪がって誰にも話さなかった。

飛保茶と北斎 【前飛保 後飛保 松竹】

まだ名が知られる前の浮世絵師北斎が、犬山城から曼陀羅寺を訪れた際、地元でつくる人気のお茶(飛保茶)を出した。すると、その色をみて「このお茶の色は、名づけるなら飛保茶色だ」と言い喜んだ。その後「飛保村曼陀羅寺全図」を完成させる。左下には北斎の印が残るその版画は今では幻の絵となっている。

飛保の赤門寺 【前飛保】

すたれていた寺を再興すべく三年かけて秀吉に懇願するがなかなか叶わない。その後一生懸命な働きぶりにやっと願いが届く。その功績を門を朱塗りにすることで後世に残す。

太子像と宗春 【前飛保】

尾張七代藩主宗春公が狩に出かけ、寺で休憩していると、住職から太子像をみせてもらう。その像を宗春は貸してくれといって城へ持ち帰ってしまう。三年ほどたったある日「かえりたーい かえりたーい」と幼子の声が寺から聞こえ、住職はあわてて宗春から返してもらったという話。(この太子像は江南市の文化財になっている)

鴨が池の蛙 【草井】

池の蛙がおせきばあさんをからかうように鳴くので、怒ってふんずけてしまう。が、それはただの鳴き声にすぎず、たまたまバカにされたかのように聞こえただけだった、という話。

草井地蔵 【草井】

年老いた坊さんが熱田神宮あたりで夜を明かしていると夢に金色の地蔵菩薩があらわれる。その声をたよりに北へ北へと歩き草井まで。そこで井戸の底からその金色菩薩を発見。大切に村人が守ることで大災害にあわなくなった。

林観音 【小杖】

田畑だけでは生計がたたず養蚕を始める作兵衛。病で蚕が全滅しても観音さまをまつた彼の蚕だけは無事だった。そこで村人も小銭を出し合い・・・。

家政公と大根 【宮後】

わんぱく童子が徳島城主となり仲良し連中が、名物の尾張大根を持って会いに行き親交を深める。しかし、親交の浅い連中は、名物でない河内大根で間に合わせてしまう。

清水のお菊 【前野】

大口村に住む美しい娘お菊は、毎日、前野の清水とよばれる湧池の横を通って古知野の工場へ繭の糸引きに通っていた。お菊と仲良くなった男が嫉妬のあまりお菊を殺してしまう。清水の近くの沼に変わり果てたお菊があったという。(今でもお菊の地蔵さまはまつられている)

若宮八幡宮 【力長】

若宮八幡宮は子どもたちの絶好の遊び場だった。悪ふざけしている子どもを叱った治兵衛は、その後、体調を崩すがすべてはご神体のせいだった。



久昌寺縁起(上)八大龍王 【小折】

日照り続きの村で、いつものようにお経を読んでいた和尚。ある日、一人の娘が両手を合わせて拝んでいた。名をきくと、五条川に住む八大龍王という。病に悩んでいたところお経の声に助けられ、治ったため、そのお礼として鱗を三枚和尚に渡した。このおかげで大雨となり村はうるおったという。

久昌寺縁起(下)吉乃の法名 【小折】

吉乃という美しい娘が織田信長に見初められ子どもを授かるが、二九歳の若さで旅立ってしまう。吉乃の遺骨は田代墓地、龍徳寺などに納められる。龍徳寺は吉乃の法名から二字をとり「久昌寺」と改め、思い出が永久に残ることを願った。

泣き地蔵 【小折】

盗つ人が尾張の寺から香川まで地蔵を盗んで運ぶが、あまりの重さに置いて逃げ出した。しばらくして地蔵がみつき桜の苗木をそえてもとの寺へ返した。その日が七月十六日と記されている。無事もどつた地蔵は、何か悪いことの起きる前になると、全身汗をかくので「泣き地蔵」と呼ばれ、今も親しまれている。

弁慶と二子山 【曾本】

若かりし頃の弁慶の怪力自慢話。小牧山をつくる弁慶とまじめに働く百姓とのやりとり。弁慶が去った後にできたのがこの二子山

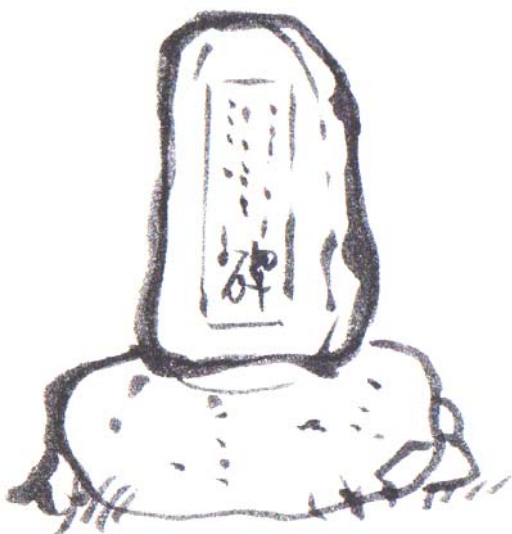
だったという。

幼川の大なまず 【曾本】

釣り好きの百姓が大なまずを釣る。家に持ち帰ると急に雷鳴、豪雨となり「おさなや。おさなやー。」の声とともに、その大なまずは縄をぬけ逃げていった。「おさなや」とは「幼い我が子よ」「川の主よ」という意味ではないかと伝わっている。

足留地蔵 【曾本】

不作続きの村から家出する人が増加。何とかくい止めようと地蔵さまをまつた。ある日、突然一人娘がいなくなり懇願する母親に「地蔵の体や足を縄でしばれ」とお告げが。そのとおりにすると娘が帰ってきたという。



こうなんのむかしばなし

- 執筆：郷土作家 滝 秀花
- 挿絵：青山 晃江
- 発行：特定非営利活動法人 子どもと文化の森
〒480-0146 丹羽郡大口町余野一丁目 153 番地
TEL/FAX 0587-94-1223
E-mail npo-bihoku@aq.wakwak.com
<http://park16.wakwak.com/~kodomo-bunka/>
- 発行日：平成 26 年 12 月 26 日
※江南市制 60 周年記念市民公募事業
「おはなしフェスティバル」の一環で作成しました。

